

Title	農奴解放後の露西亜社会運動 (一)
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.7 (1924. 7) ,p.977(67)- 996(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240701-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

農奴解放後の露西亞

社會運動 (一)

伊 藤 秀 一

「解放は時代の叫びであつた。農民の農奴制度からの解放、人民の國家からの解放、婦人の家長權的專制からの解放、思想の權力及傳統からの解放、結局、政治上、經濟上、宗教上及社會上の總ゆる不合理なる壓制的なる制度に對する闘争が爲されねばならない、新しき秩序は常に現存状態を改善するに止まらず、社會を其の根柢から改造せねばならない」と叫ばれた。斯くて

覺醒せる輿論の強大なる壓力は政府を促して、千八百六十一年二月十九日歴山二世をしてかの有名な農奴解放令に署名せしめ、五千二百萬の農奴が解放せられた。此の條令は全階級の間に未曾有の熱情を喚起した。Heizen は其の主宰する雜誌「鐘」に於て皇帝に向ひ、「を、ナザレよ、陛下は勝てり」と言ひ、他の同様なる革命的手段に依つて改革を繼續せん事を皇帝に慫慂した。(註一)

Hecker が前世紀六十年代初頭の露西亞に就いて斯く叙述して居る様に、洵に未曾有の暴虐なる專制的壓迫の治下に極度の無智と貧窮を苦難し來れる露西亞の國民は、カタリナ二世の啓蒙期(十八世紀後半)を轉機として流入し來れる西歐思想の影響の下に自ら過激なる革命思想を其の内部に醸成し、斯くて總ゆる社會的羈絆より脱卻せんとする解放の叫びは澎湃として舊

特權階級の堅壘に迫るの情勢であつた。

第一の斧鉞は農奴制度の上に加へられた。かの十八世紀中葉以降英國に其の端を發せる産業革命が西歐諸國に於ける生産組織を一變し、近世資本主義的大工業組織の増大と隆盛を招徠しつつあるの時に際し、露西亞の社會組織は依然として農奴制といふ、奴隸經濟を其の基礎として居つたのである。故に社會の根本的改革の爲めに先づ農奴制度を破棄し農民を解放する事が其の前提條件であつた。農奴制度の廢止は實に當時の社會組織の根本原則を顛覆する事であつた。

農奴解放令の宣布は總ゆる社會階級を通じて無限の熱情を以て迎へられた。農民は繫縛の廢棄が如何なる方法で成就せらるゝかを記載せる所の浩瀚な記録を理解する爲めに熱心に努力した。(註二) 實に農民に依つて許りではなく社會

一般も亦此の改革を以て行詰れる社會状態を打開し一新するものとして歓迎した。活潑なる國民生活が廣く翹望せられて居た。加之、資本主義的發達の氣運が此の國に於ても既に熟しつゝ、

あつたと言ふ事が出来る。廣汎なる鐵道敷設の計畫は徐ろに實現の歩を進め其の爲めに勞働の豊富なる供給が必要であつた。貨銀は高められ地價も亦著るしく騰貴して居た。一般の情勢は頗る樂觀的であると信せられた。(註三) 若しも當年の農奴解放の實際的計畫が一切の傳統的の情弊を回避して、徹底的に其の主意を貫徹し得る様な革命的變革であつたなら、縱令此の誘因が社會組織の根本的改造を企圖する所の過激な革命思想であつたとしても、農奴解放の結果は遙かに違つた方向へ露西亞の將來を導いて行つただらう。然るに解放令の實際は社會一般の叙上の熱情を裏切つて、特權的地主階級の利益擁

護のみを主眼とする露西亞支配者の傳統的的政策

に依つて再び禍ひせられた。解放の不當なる條件は農民の奴隸的境遇を些かも改善する事がな

かつた許りでなく此の法令の結果彼等に課せられた過重の負擔は彼等の經濟生活をして、今や封建的隷屬と資本主義的搾取との相搏つ異様な桎梏の下に於て、以前よりも更に一層悲惨なる貧窮と壓迫とに導いて行つたのである。

時代の革命的精神は此の事實に依つて極度に激成せられた。而して爾來革命的叛逆と專制的抑壓とは露西亞社會半世紀の歴史を貫流する二條の太き潮流となつた。私は以下斯の如くして激成せられた所の農奴解放以後の露西亞社會運動の概要を述べ、且つ此等の社會運動の思想的背景を考察し様と思ふ。

(註一) Hecker: Russian Sociology, p. 36.

(註二) Jams Mavor: An Economic History of Russia.

vol. II, p. 71.

(註三) Ibid.

二

農奴解放後の社會運動は當時の精神運動と密接に結合して居るといふ事、故にそは又解放前の革命的反亂(註一)とは異なり明確な理論的基礎を持つて居るといふ事を先づ指摘しなければならぬ。

十八世紀末以降の西歐に於ける精神運動は洵に絶大なる反響を露西亞に齎した。Hegelの學說に最高の表現を示した所の理想主義哲學は次第に其の論據を失ひ、Feuerbachの一元論的唯物論が之に代り、續いて Vogt, Moleschottの唯物論及種々の傾向の實證論が優勢となつた。而して新しき精神的風潮は自然科学の領域に於て爲された偉大なる發見の中に廣汎なる支持を見出した。新世界觀は速かに露西亞に移入せられた。ヘーゲル派の哲學は擯斥せられ、新思潮は科學、

文學及出版界を風靡し、それは獨逸理想主義哲學の發展せる思想體系として知識階級の間に容易に受け入れられ、斯くして甚だ急速に蔓延した。

一八五七年から一八七〇年の間に於ける露西亞の精神運動は多くの點に於て大革命勃發以前の佛蘭西のそれを想起せしめる。併し恐らくは「露西亞革命史」の著者 Kulczycki に遵つて此の運動の最も顯著なる特徴として次の諸點即ち現實主義 (Realismus) 合理主義 (Rationalismus) 功利主義 (Utilitarismus) 並に生活及自由の讚美等を擧げる事が出来よう。現實主義の示す所は人が總ゆる純正哲學的思想體系を放擲して、個人的領域に於ても社會的領域に於ても實際の生活問題を充分に考慮するといふ事である。美學に於てすら此の努力が表明せられて居る。「美は生活である」(„das Schöne ist das Leben“)とはチェ

幾百年の長きに亘つた制度の壊滅 (奴隷制度の廢止) に參加した。露西亞は白紙の如きものである。人は科學及社會的感情の指示する總てのものを容易に其の上に書く事が出来る。時代の人々は斯く信じたのである。加之、嘗て數世紀の間愚鈍の生活に追ひ込められ、其の大多數が艱難なる境涯の下に苦んだ所の露西亞國民は今や新しき啓蒙期に際會し新しき秩序を保有しなればならないとの意識は彼等の間に潑刺たる感情を喚起した。從來非常に強制的に束縛蹂躪せられた生活は今や反對に一般的崇敬の的となつた。一切は生活の上にはなくては生活の爲めに、一切は個人及び社會の幸福の爲めにといふのが一般の要求であつた。生活の下に彼等は現實の世俗の生活換言せば肉體の生活及び精神的生活の密接なる結合を理解した。世俗的生活の此の尊敬は非常に強かつたので彼等は何等かの未來

ルニシェプスキイの斷言する所であつた。此の現實主義運動は所謂合理主義と密接に結び付いて居る。總ゆる神學的、純正哲學的及び慣習的束縛から解放せられたる批判的精神は感情、願望及び思考の最も神聖なる領域に闖入した。人々は總てを理解し、總てを評價せんと欲し、確乎たる存在的理由を有せざるものは總て之を排斥し、正當なりと信せられたるものは總て之を支持せんと欲した。斯の如き合理主義の信奉者は彼等の思考の最も過激なる推論を躊躇しなかつた。彼等は傳統の前に決して怯懦となる事なく彼等の外的及び内的生活を全然、かの最も廣い意味で理解する、所の功利主義の原理に従つて形成することのみをその願望とした。當時の人々は進歩及び人類の繁榮に對する無限の信仰を持つて居た。保守と無學との濃霧を一掃した。彼等は今や科學の光輝ある勝利を経験し、且つ

の生活と夢想するよりは寧ろ幸福の可成り思想と行爲に依つて完全に滿されたる生活を現實の中に見出さうと努めた。現實主義は彼等の總ゆる思考と努力とを貫徹した。故に一切の抽象は否定せられた。(註二)

疑ひもなく英國の思想家は當年の露西亞知識階級に絶大の影響を與へた。Spencer, Darwin, Mill, Buckle の著作は廣く讀まれ Comte の學説は異常なる賞讃と尊敬とを以て迎へられた。併し乍ら此等思想家の著作の迅速なる普及は露西亞の知識階級が彼等に盲目的に隨從したといふ事の證明にはならない。此等偉大なる學者の理論は露西亞の著述家の思索に對して其の出発點となつたに過ぎない。後者は其の卓絶せる獨自の力を以て此等の思想を咀嚼し、之を以てその獨特の社會的必要に適應せしめたのである。(註三)

要之、農奴解放後の新しき精神的運動及び社會的運動は又一の新しき哲學的傾向を其の基調として居る。理想主義の哲學が影を潜め唯物主義的傾向が優勢となつた。即ち Feuerbach, Spencer, Darwin, Comte が Hegel に代つたのである。(註四) 併し露西亞に於ける新傾向の指導者等は最早や此等先哲の教義を其儘模倣し妄信するの域に留まらなかつた。彼等は其の思想を露西亞獨特の社會的進化及び經濟的必要に適應せしめ其處に独自の社會觀及び經濟觀を構成するに至つた。而して此等新傾向の代表者として大體次の三者を指摘する事が出来る。チュルニシヤノスキイ (Černyševskii) ドプロロリョーボフ (Dobroljubov) 及びピヤルソフ (Pisarev) (註五) などある。

(註一) 露西亞に於ける革命的社會運動の創始と稱せられ
る十二月黨員 (Decarists) の叛亂 (一八二五年ニコラス一

世即位を機としてセント・ペタルスブルクに行はれたるもの) の如きも畢竟當時の西歐自由思想に刺戟された若き理想主義者等の政治的 Coup d'état に過ぎなかつたので民衆の一般的感情とは殆ど没交渉であつた。又、遡つて一七七三年のプガチョフ (Pugachev) の革命的叛亂の如きは農奴制の廢棄を地主階級の剿滅を宣言し、廣く農民の欲求に合致したる、且つ全露西亞を震撼したる、大運動ではあつたが要之一個の暴動に過ぎなかつた。露西亞の革命運動が社會運動の色彩を帯び來つたのは農奴解放以後の事である。

(註二) Kulczycki: Geschichte der Russischen Revolution. Band I. SS. 292-294

(註三) ebenda: S. 294.

(註四) Rabinowitz: Zur Entwicklung der Arbeiterbewegung in Russland. S. 76

(註五) 人名其他の露西亞名はマヤリツク著「露西亞の精神—歴史、文學及哲學の研究」(英譯本) Masaryk: The Spirit of Russia. Studies in History, Literature and Philosophy) の例に倣ひ倫敦 King's College の Slavonic Library にて採用する所の文字譯に據る

III

沟にチュルニシヤノスキイ (Nikolai Gavrilovič Černyševskio) は農奴解放後の精神運動並に政治的社會的運動に於ける最も卓越せる指導者であつた。彼の思想は急進主義者の間に其後永きに亘つて絶大の影響を與へて居る。彼は英邁なる理會と該博なる教養を具備し、其の著述に於て哲學、經濟、文學、美學及歴史哲學等の總ゆる問題を論じた。(註一)

彼は一八二八年サラトフ (Saratov) の非貴族僧侶の家に生れた。最初其の父に依つて僧侶としての教養を受けたが、後文學及び科學に對する卓拔なる才能を見出され、同四六年セント・ペテルスブルグ大學、歴史言語學科に送られた。

幼にして博覽既に古今東西の言語に通曉せる實際上の言語學者であつたと言はれる。詩及聖典を放擲して歴史的文書に没頭し Belinskii の著作を耽讀し、又獨逸哲學や佛蘭西社會主義者の諸

著を涉獵した。一八五〇年 Gymnasia (我國の高等學校程度のもの) の教師として歸郷し、此間史家 Kostomarov との交遊あり、留まる事三年、伉儷を得てセント・ペテルスブルグに轉住した。翌一八五四年かの露西亞近代文學の先驅者 Puškin の創設に係り一八四七年以降詩人 Nekrasov に依つて編輯せられたる雑誌 "Sovremennik" (「現代」) の同人となり、彼の偉材は

期せずして同時代の精神的政治的指導者たるものである。同誌上の筆致誠に光彩陸離たるものあり、而も一八五三年より同六三年に亘る文献は拾一卷の大冊に餘ると稱せられる。然るに概ね彼の影響に歸せらる可き所の政治的反抗の氣運は後述する如く一八六一年に至つて熾烈を加へ、此事は引いて累を彼の身邊に及ぼし、先づ同年 "Sovremennik" 誌上の盟友 Mikhailov (詩人にして翻譯者、宣言書「青年に與ふ」の筆者

と認められてシペリアに流刑され一八六五年其地に逝く)が逮捕され、翌年同誌は八箇月間發行を停止せられ、チュルニシユブスキイも亦貳箇年の禁錮の後シペリアへ終身の追放を宣告された。(註二)時に齡三十五。爾來彼を釋放せんとする總ての計畫は無効に終り殆ど二十年を経て漸く其の歸還が許容された。こは政府が革命主義結社「人民の意志」黨(Narodnaja Volja)の委員會との折衝に於て、後者が歴山三世の領域にて擾亂せざる旨を約した條件の一として、チュルニシユブスキイの放還を要求した事に起因する。一八八二年 Astrakhan に送られ、同八九年始めて郷里 Saratov に入るを許されたるも既に身心困憊の極に達して再び起つ能はず、數箇月の後、六拾一歳にして病没した。(註三)

チュルニシユブスキイは假令佛蘭西の合理主義及び實證主義から影響せらるゝ事が少なくはな

三年に上梓せられたる彼の最初の創作「何が爲る可きか」(英譯「A Vital Question or What is to be Done?」)は虛無主義の福音を宣へ傳へたものであると言はれ、此事は Kropotkin を初め當時の事情に精通する者の共に容認する所である。此書に視はるゝ現實主義者又は虛無主義者は徹底せる實證論者であり物質主義者であり且つ自我主義者である。而して此等の一般的原則は既に早く彼が Feuerbach の學說に準據しつゝ、其の幾多の論文の中に解明せる所のものであつた。(註七)併し乍ら哲學上の諸問題に關するチュルニシユブスキイの推論は自ら幾多の矛盾を包藏し、其の心理學及認識論は明徹を虧いて居た。唯物論は彼にとつては一の信仰であり且つ政治的綱領であつたと見るのが至當である。彼の人類學上の原則が急進的青年の綱領となつた理由は此の點に存するのである。(註八)

かつたけれども其の學說は概ね Hegel 派哲學の左翼就中 Ludwig Feuerbach に依つて承認せられたる哲學上の假説即ち唯物論を踏襲した。彼にとつて一切の歴史現象及び社會現象は辯證論的發達過程である。彼は有機界及無機界を一樣に支配する所の唯一の法則のみを信じた。(註四)然るに彼の學說は決して盲目的隨從の域に制限せられなかつた。Feuerbach の哲學は彼自身の獨創的見解の出發點となつて居るに過ぎない。彼は文學を以て豊富にして多様な生活現象の映像であると信じた。(註五)更に著るしく彼は Comte の所謂實證主義者、否寧ろ露西亞で用ひられる語義に於ける所謂現實主義者(“realist”)であつた。Ivan Turgenev が其の名篇「父と子」に於て虛無主義(Nihilism)と稱へた所の六拾年代の現實主義の基礎はチュルニシユブスキイに依つて與へられた。(註六)一八六

社會問題及經濟問題に對する彼の見解は John Stuart Mill の「經濟原論」(Principles of Political Economy)露語譯の註釋(註九)及び露西亞に於ける土地共有制度に關する諸論文中に表明された。

彼は功利主義倫理觀及社會學と Mill との密接なる關係に着目した。彼自身の經濟觀は倫理的である。經濟學は常に經濟生活の病理學たるのみならず其の醫術であり衛生學でなければならぬ、經濟學の任務は人が其の經濟的破壊を回避する爲めに何を爲す可きかを教へる點に在る。競争と争闘は絶滅す可きである、彼は斯の如く觀じた。經濟的諸關係に對する倫理觀は彼の勞働の尊重に於て顯著である。Fourier の所說に遵つて、勞働は其の多樣といふ事に依つて本質上快適であり且つ魅惑的であるとし、勞働の苦痛なるは概ね「偶然的の外部的條件」に歸せ

らる可きものであると主張した。故に勞働は何人も嫌厭する所のものであると信じ且つ勞働は一個の商品であるとする一般的の經濟的見解を擯斥し過度の分業を攻撃した。彼は又明快なる筆致を以つて、資本主義的生産の罪過、昔者嘗て獨立獨歩せる工業勞働者の無産階級化、少數者の掌中に富の集積する事等を描出し資本主義の根本的弊害は自由競争であると述べたけれども同時に資本主義が個人主義の成長を促進せるの事實を容認し、製造工業の發達及び其の發達を増進したる近世企業的精神を稱揚した。(註一〇) 即ち彼は次の如く言ふ。「分業が現在の制度の下に於て經濟組織並に勞働組織に及ぼす弊害は最早や一點の疑ひもない。併し人類の幸福の爲めに生産の増加を必要とし、而して生産の増加は分業を要求する。」茲に「我々は斯の如き結果を招徠する二個の形式を持つ。其難點は人民

の幸福に必要である所のものが同時に其の發展に依つて人民の大多數を破壊するといふ事である」。(註一〇)此の二個の形式を如何に調和し、此の難點を如何にして脱卻す可き乎。矛盾撞着せる資本主義組織の此の難關を回避し得る唯一の方法を彼は露西亞に於ける村落共產團體制度(「Мир»)の中に見出したのである。

(註一) Kulczycki: Geschichte SS, 297-298

(註二) シニョア追放の刑は如何なる理由に基いたのかは全然不明であつた。當時流布されてゐたチェルニシエフスキイの著作は皆檢閲を通過したものであつた。故に出版法違反とか又は革命主義の秘密宣傳とかいふ様な事で處刑されたもの、如く想像される。斯の如きが當時の迫害の一般的情勢であつた。

(註三) Masaryk: The Spirit of Russia, vol. II, pp. 1-2. 所載の略傳(Consult G. Pechanow, N. G. Tschernischewsky eine Literar-Historische Studie, Dietz, Stuttgart, 1894)に因る。

(註四) Hecker: Russian Sociology, pp. 79-80

(註五) Kulczycki: Geschichte, S. 299.

(註六) Masaryk: vol. II, p. 9 & p. 6. チェルニシエフスキイは又「露西亞無主義の父」と呼ばれて居る。(Hecker: p. 79 脚註参照)。

キイは又「露西亞無主義の父」と呼ばれて居る。(Hecker: p. 79 脚註参照)。

(註七) Ibid. pp. 11-12

(註八) Ibid. p. 6

(註九) Marx は「資本論」(「Das Kapital」)の第二版序文に於て Mill の經濟學に關するチェルニシエフスキイの著作を賞讃し次の如く記して居る。「一八四八年の歐羅巴大陸革命は又英吉利へも反動した。斯くて尙ほ學問的格式を保ち支配階級の單なる詭辯論者若くは阿諛者たることを以て満足しない人々は資本の經濟學をば當時既に無視し能はざる迄に發達したるプロレタリアの要求を一致せしめんとした。そこでシヨン・スチユアートのミルを其の最良の代表者とする一の淺薄なる妥協論が生じたのである。之れ正にブルジョアの經濟學の破産を宣明したもので露西亞の大學者にして又大批評家なるニコライ・チェルニシエフスキイは既に其の著「ミルに據る經濟學概要」に於て此の事實を巧みに闡明した」(高島繁之氏訳「資本論」第一卷第一册、序文一四頁)

(註一〇) Masaryk: p. 32

(註一) Works, St. Petersburg ed., 1906 vol. vii, p. 183. Cited by Hecker: Russian Sociology, pp. 83-84.

四

凡そチェルニシエフスキイの考ふる所に遵へば社會とは個人生活の總和に過ぎないものであ

る。而して其の發達の初期の階段に於て之を支配するものは地理的氣候的條件であるけれども、文明社會に於ては之等の外部的影響は第二次的のものとなる。謂へらく「歴史的進化の階段に達せる民族に於ては、其の職業及び習慣は自然や又自然の所産である所の氣質に依つて説明するとは出来ない」、文明社會に於て主要なる勢力となるものは理性である。「氣候、土地、資本の源泉、勞働力―此等も思想の發達に比ぶれば殆ど無視するも差支へなき程である。思想の發達から萬事が起り萬事が衝突する。思想と比較せられる程の偉大なるものすらも亦然りである。萬事は思想に依つてのみ支持せられる」。然るに進歩は一の物質的必然に他ならない。「進歩は單に生長の法則である」。而して社會の歴史に於ける進歩の諸要素は自然の歴史に於けるよりも遙かに複雑なるが故に社會進歩の法則を發見するこ

とは一層困難ではあるが、而も其の法則は生命の一切の範圍に於て同一である。謂へらく、進歩は緩慢に行はれる、併しその十分の九は熾烈なる活動の短期間に成就せられる。歴史は徐々に動くけれども其の進展は殆ど常に飛躍的である。飛躍の後に反動が起る。而も斯の如き反動は必然的により、大なる進歩に對する刺戟を與ふるものである。けれども歴史的重大事變は或特定の個人の意志又は何等の人格者に依憑するものではない。それは恰も引力の法則或は有機的生長の法則の如き恒久不變の法則に遵つて實現せられるものである。且つ必然的なる進歩の過程の緩急は豫定又は豫見し得ざる事情に依屬して居るのであつて、斯の如き事情の中最も重要なものは即ち強き人格者の出現である。彼等は其の活動の性質に依つて、事變の不可變的進行に一定の特色を與へ、其の進行を或は促進し或は

阻止し、而して彼等の卓越せる力を以て、民衆を動搖せしむる所の混沌たる、諸勢力に明確なる方向を與へる。斯く觀じれば彼等も亦畢竟時代の *agent* であり歴史の必然の一要素である。従つて又社會の要求と社會の標準に服従しなければならぬ。併し彼は輿論を以て進歩の直接原因とは考へなかつた。彼は次の如く言つて居る。「輿論は社會の害悪と其の救済方法のみを示す。而も此の救済が爲されないならば害悪は依然として殘留する。又總ゆる社會現象は社會を支配する所の法律に依屬する。……若しも法律が其の病患の徴候を抑壓するために作らるゝならば全然無力のものであるけれども、立法者が害悪の眞の原因を探究して其の害悪の所産である所の制度を變化する如く行つたならば其の法律は眞に有力なものと言ひ得るのである。(註一)

更にチュルニシュプスキイは制度の意義を著しく重要視し、社會の習慣は人民の諸制度に從屬し、其等に依つて變化せられると言つて居る。曰く「我々が歐羅巴諸國民の歴史を注意深く研究するならば、所謂諸國民の特性なるものを彼等が其の影響の下に生活せる、又現に生活しつつある人民の諸制度に依つて説明する事が出来る。……國民は其の制度及び法律の精神に調和する様に其の習慣を變化した。且つ事情及び制度は各國に依つて異なるが故に最初は全然同一の習慣及び性癖を持つて其の存在を始めた國民も現在では全く異つた習慣と性癖を有する國民となつて居るのである」。習慣は人民の諸制度に依つて創造せられる。人民の制度を變更しない法律は習慣に對しても亦無力である。人民の制度の變更に伴つて國民の習慣は必然的に變化する。而して一國民の間に斯の如き制度の變革を

齎す所の原動力は即ち急迫せる歴史的事變であると考へ、且つ言ふ「制度の進歩は現存社會の欲望の進化と諧調する所の變化の裡に存する」。(註二)

チュルニシュプスキイが叙上の見解に従ひ、斯の如く人民の間に存する制度の絶大なる力を高調した所以は、以て露西亞農民の間に殘存する所の村落共產團體制度の支持と發展の主張に適應せしめんが爲めであつた。Herzen と同様彼も亦社會主義的社會實現の爲めに總ゆる國家が必ずしも資本主義的發達階段を経由するの必要がないと信じた。斯の如きは疑ひもなく Marx の社會進化の學說に背反するものである。個人的にも又著作の上に於ても彼は殆ど Marx を知らなかつたのである。(註三)而も露西亞の社會的進化に關して彼が此國の土地共有制度に加へたる批判と見解 即ち此の制度に重大なる意義を

附與し、之を以て將來の社會主義社會の萌芽なりとせる思想は爾來早く革命主義者の信條となつた。思念へらく、斯の如き制度は、社會主義的社會組織の實現といふ事がかの私有財産の優勢なる觀念が總ゆる法律意識の中に織込まれ國民の習慣と本能の中に滲入せる國に於けるよりも此の國に於てより容易に遂行され得るといふ理解と習慣を人民の間に成熟せしめたのである。而して彼の希望する所は、斯の如き共有制度を一層完成せしめ、各個の創造力を阻害することなく而も同時に總ゆる發明を適用し得るが如き大企業組織を以て之に結合せしめんとするにあつた。換言せば分業の法則に依る資本主義的生産方法の利益を土地共有制度に附帶せしめ、且つ此の制度に依つて分業の原則の結果として必然的に起る所の個性の發展に對する障礙を除去せんとするにあつた。(註四)

村落共產團體制度(Mil'its)の社會的價值に關するチュルニシエプスキイの意見は一貫して居た。一八五七年の彼の評論中にはミル制度に關するHaxthausenの議論(註五)の拔萃が散見する。故に最初彼は Haxthausen 及びスラヴ主義者(註六)其見解を等しくして居た様に思はれる。併し其後に至つて彼は村落共產團體制度の弱點と其れが個人を抑壓する傾向のある事を容認した。且彼は此制度を以てスラヴ主義者の主張する如くスラヴ民族獨特の所産でもなく、西歐主義者(Westernists)(註七)の或者の唱道する如くモスコウ王國の人工的産物でもなく、曾て總ての人類に共通なりし原始的制度の遺物なりとし、此の制度は西歐に於ては滅亡したけれども、露西亞では種々なる歴史的事情に依つて今日猶其の命脈を保つて居ると考へた。而して其の事情の如何に拘らず露西亞はミル制度といふ土地共有制

の基礎の上に社會主義化され得るとの確信は牢固たるものであつた。(註八)

(註一) Hecker: pp. 308r

(註二) ibid. p. 82

(註三) Marx の經濟理論は當時の露西亞では全然知られて居なかつた。勿論彼の名著「資本論」第一卷のト梓せられたのは一八六七年であるから之は當然の事ではあらうが、「共產黨宣言」や「哲學的貧困」や「經濟學批評」は既に出版せられて居た。而もチュルニシエプスキイは全く此等の諸著を看過した。一八七二年に資本論の寫本がシベリアの彼の許に送られたが彼は此書又は其の著者に就いて遂に一言する所がなかつたと傳へられて居る。

(註四) Kulzoyki: S. 301. 及び Hecker: p. 83

(註五) 獨逸の農業研究者 Haxthausen は一八四三年より翌年に亘つて露西亞を旅行しミル制度及一般經濟狀態を調査し、Studien über die inneren Zustände, das Volksleben, und insbesondere die ländlichen Einrichtungen Russlands (3 vols. 1847-1852) の一書を公にした。而して其のミル制度觀は大體、スラヴ主義者の見解に一致した。Roscher は之に對する有名な批評で、彼が農奴制廢止の後に於てまへ露西亞の村落共產團體制度を維持す可しと推論し、斯くして耕作の特定の階段に於ける過渡的特質と國民性の恒久的

特色を混同せる事を非難して居る。(Palgrave: Dictionary of Political Economy, vol. II p. 294 參照)

(註六) スラヴ主義者(Slavophiles)は其の極端なる國家主義的見地からミル制度を以て全露西亞民族の社會組織の基石であつて、國體員の完全なる合意に基いて建設せられた倫理的社會であるとし、斯くてそれは Tsar の家長權的獨裁政治の下に一大家族を構成するものであると觀じた。

(註七) 西歐主義者の主張はスラヴ主義の保守的思想と正反對の立場にある。露西亞は先づ先進文明國に學ばねばならぬといふのが其信條であつた。Kadejev, Balinski, Herzen 等が其中に算へられる。

(註八) Masaryk: pp. 33-34 Hecker: p. 84.

五

露西亞村落共產制度を以て將來の社會主義的社會組織の基礎たらしむ可しとのチュルニシエプスキイの見解は二個の相關聯せる思想に基いて居る。其の一は「進化の最高階段は形式に於て原始階段と同一である」(註一)との觀念之である。其二は「原始的民族は必ずしも總ての中間的階梯を通過することなくして進歩的民族の成

業を受容し得るが故に、露西亞は直接最低階段より最高階段へ飛躍し得る(註二)との信仰である。恐らく彼に遵へば現在の所有制度を共產主義組織に變革する爲めに先づ私有財産制の支配する時期が前提とならなければならぬとして、此の時期は或國に於ては甚だ長く又他の國に於ては短期間にて足るといふ様に、多種多様である。換言せば露西亞は西歐諸國の成業の結果に依囑して直ちに此國に優勢なる土地共有制度から共產主義に飛躍し得るか、若くは私有財産制度の期間を極端に短縮する事が出来る。而も第一の場合の可能なるは一點の疑ひなき所である。彼は一般に土地私有の實現に伴ふて人民が其の團體組織から脱退し去る事を恐れた。彼が Hegel の形式を藉りて示す所に依れば、土地共有制度は措定 (These) であり土地私有制度は反措定 (Antithese) であり其の綜合 (Synthese) は

全然非認したとも思はれない。此點に就て彼の計畫は漠然たるものであつた。(註六)

政治上の改革運動に對するチュルニシエブスキイの意見は最初著るしく懷疑的であつた。縱令彼は西歐文明の熱心な謳歌者ではあつたが西歐諸國の一切の施設制度を盲目的に稱揚する事を非難し、當時の自由主義者の態度を嘲評し、政治形態の如何は社會主義的成功と相關する所なしと主張し、又労働者は政治的改革に依つて全然利益する所なきものなるが故に斯の如き改革は絶對に無價値であると論じた。此の見解は後に至つて變改せられた。疑ひも無く彼の參與せる所の革命主義的團體及び其の機關紙に於て政治的要求が經濟的社會的要求と同様に強調せられて居るのが其の證左である。併し乍ら前述せる如く其の經濟觀に於て將又社會學的觀察に於て遂に Marx の其れと交流する所無かりし彼

が共產主義である、而して露西亞は反措定を回避し得るだらうと彼は考へたのである。(註三)彼は言つて居る。露西亞社會の緩慢なる進歩といふ弊害にも拘らず西歐諸國の經濟的進化の現状に於て、此の緩慢が最も重大にして且つ有用のものとなつたのである。(註四)

然らば斯くして招徠せられる新社會秩序は如何。こは社會主義的原則の上に組織せられたる社會、即ち其の經濟的秩序が一般的計畫に準據し社會の欲望に適應する様に組織せられたる社會である。Fourier の理想とせる社會は又チュルニシエブスキイの理想とせる社會であつた。(註五)而して斯の如き理想を實現する爲めに彼は村落共產制度 (Muir) 及び同業組合 (Artel) を基礎とせる協同主義的 (Cooperative) 生産組織を推舉した。此協同主義は個別的關係たる可きものである。併し彼が國家に依る此等組織の統制と

は労働者階級の政治的任務に關する考察に當つても遠く前者の明確適切なるに及ばなかつた

彼は労働者階級を他の社會階級から嚴密に區別することなく又其の所論の對象は一般被搾取者階級であつて、特定の労働者階級ではなかつたのである。恐らく斯の如き舉止は彼が自國にのみ留まつて社會的經濟的發展のより高度に達せる他國に直接するの機會を有しなかつたといふ事實に歸せられるかも知れない。加之彼は民衆の無氣力を感じ、其の無智と舊弊を知悉し、如何に甚だしく傳説が人民即ち農民を繫縛して居るかを看取した。故に上からの改革のみが露西亞を其の現状から解放し得るだらうと確信した。然るに斯の如き改革を斷行せしめんが爲めには、其の前提として黨派的活動又は大衆運動の如き下からの運動を必要とすと考へたので、何等外部的激動なくして露西亞は完全なる變革

を成就し得可しと説ける Herzen の欺瞞を責め 彼との論争に於て Herzen と其友人 Ogarev は 共に自由思想家にして、反抗的精神を有するも 歎息と慟哭の他何物をも吐露する所なしと難 じ、彼等は無用の人物であると極言した。此批 評は誇張と苛酷に過ぎて兩者の功績を充分に付 度する事なく、且つ其の下に彼等の闘争せる艱 難なる外部的事情を閑却した憾みがある。而も 此の寸評は年齢漸く三十にして祖國に高名を謳 はれたる、而して自ら思辯的生活の裡に踟躕す るを屑しとせずして敢然被壓制的民族の爲めに 奮起せる、露西亞革命運動先驅者の熱情を察知 せしむるに足る。露西亞の内情に精通したる彼 は此國の社會的政治的變革の前途に横はる一切 の困難と其の爲めの闘争が直ちに遭遇す可き幾 多の潰敗を充分に豫見して居たがそれにも拘ら ず、長き沈思の後に到達したる確信は同志を糾

合して革命運動の烽火を擧ぐるとを以て自らの 義務と思惟するにあつた。より善き未來の爲め の闘争は縦令如何なる損失を蒙むるとも他日其 の効果を收め得可きは明白の理である。(註七)

農奴解放直後の露西亞を風靡したるチュルニ シェプスキイの革命思想は政府當路を極端に畏 怖せしめ、寒村僻陬の地に彼が縲紲不遇の後半 生を終るの餘儀なきに至らしめたものであつ た。

(註一) Works, vol. iv. p. 331. cited by Hecker. p. 84
 (註二) " vol. iv. pp. 327 et seq. Hecker. ibid.
 (註三) Kulczycki. S. 302
 (註四) Hecker. p. 84
 (註五) Masaryk. vol II. pp. 11-13
 (註六) ibid. pp. 33-34 參照
 (註七) Kulczycki. Ss. 303-308 參照

六

チュルニシェプスキイの文筆的活動と相並んで農奴解放後の露西亞社會運動の思想的方面に

拂拭し難い印象を止めて居るものは諷刺的批評 家ドロリュエボフ(Dobroljubov)である。(註一) 彼の社會觀及經濟觀は概ね前者のそれを踏襲し たるものであつて、主として彼の卓越せる文學 批評(註二)を通じてのみ窺知し得る所なるも、其 天稟の才と、事物に對する明朗透徹なる觀察力 及理會に依つて當時の社會的病弊を指摘し詰責 する事頗る辛辣であつた。チュルニシェプスキイ に遵つて彼は如何に各個人の功罪が社會的還境 の產物であるかを示した。彼の文學批評は家族、 階級及一般社會制度の鋭利なる解剖であつた。 彼は自由主義者を排斥して文明の無力と疾患 に苦しむ者であると嘲り、之に反して農民の意 志と力を過信し彼等は前者に比して身心共に健 全であると稱揚した。斯の如き見解は明にチュ ルニシェプスキイの賛同せざる所であつて彼が 以て浪漫主義と稱べるものである(註三)。併し乍

ら凡そ露西亞社會の特殊的飛躍的進化を確信 し、其の經濟的基礎を村落共產團體制度の中に 見出し、之を以て原始的共產形態の遺物なりと 觀すると共に、其の進歩發展に依つて、そは將 來の共產主義社會の經濟的單位を形成するに至 る可しと爲せる當時の斯の如き一聯の思想は、 自ら其の中に、農業の過重、農民生活の理想化 及び露西亞農民(Musik)を以て唯一の革命的分 子なりとする信念を隨伴して居つたのである。 彼等は勿論進歩的であつた。故に保守的スラヴ 主義者の如く露西亞國民の頭腦に深く浸み込ん で居た所の「母なる土地」といふ様な土地の神話 的觀念に捉はれたものではなかつた。唯彼等は 村落共產制に絶大の希望を繋ぐ結果として、農 民及村落生活の道徳的價值に關する無批判的見 解から完全に脱却する事が出来なかつたのであ る。彼等の思想はナロドニチュストプオ(Narod-

thiĭestvo) —— ナロドニキの思想——と呼ばれ
後年の露西亞マルクス主義と對比せられる。

さてドブローリューボフは其の天稟の英才を以てし乍ら何等獨創的思想を編むの暇なく天折したけれども、彼の雄渾なる文筆的活動の功績は當時の社會運動史上省筆を許さざるものがある。Masaryk は次の如く記して居る。「ドブローリューボフの文筆ドブローリューボフの現實主義的批判は一の政治上の武器となつた。實際上彼の批評の文字は行動に變化した、論敵の語を以てせば暴力的行動に變化した。」(註四)と。

私は進んで概ね叙上の急進的社會主義的傾向に類する第二の思潮、即ち露西亞の社會的並に精神的生活の歴史に於て虚無主義(Nihilism)の名で呼ばるゝ思想と其代表者ビツサレフに就ての概要を述べ様と思ふ。

(註一) ドブローリューボフは一八三六年ニシニ・ノブゴロ

expenditure) の何れに適用されると考へらるゝにせよ、生産的及び不生産的(productive and unproductive)なる二語の適當なる用法に就ては今日多數の經濟學者が其の見解を異にせるものであるが、思ふに是れ以上に異論多き二説を指摘することは難事であらう」とは、ジョン・スチュアート・ミルが其の著「經濟學上未定の諸問題」第三論の劈頭に叙述せる言である。(J. S. Mill, Essays on some unsettled Questions of Political Economy, 1874, 2nd. edit., p. 75.) 勿論此の生産的及び不生産的なる語を區別することは、術語の問題に過ぎぬのであるけれども、而も之を満足に解決するために努力することは甚だ重要な次第である。何となれば多數の經濟學者は常に是等の術語に對したる觀念に於て一致する所がなかつたとは云へ、其の術語は一般に極めて重要な觀念を表示するために用ひら

ッドの僧侶の家に生れた。其街の神學校で教育され、後出で、セント・ペテルスブルグの師範大學に學んだ。一八五四年兩親を失ひ其結果家計に窮したので彼は翻譯や個人教授か以て僅かに一家糊口の資に供せねばならなかつた。一八五五年チエリニシエフスキイの知己を得彼から殆ど決定的の影響を受けた。同五年「現代」(Sovremennik)誌上に批評家として認められ、爾來同誌編輯部の本業に盡瘁せるも一八六一年肺病を病んで早逝した。

(註二) 彼の文學批評中オストロフスキイ(Ostrovskii)の劇曲、ゴンチャロフ(Goncharov)の「オプロカヤフ」及びツルゲネフ(Turgenev)の「其の前夜」等に関するものが特に著名であると言はれる。

(註三) Masaryk: The Spirit of Russia. Vol. II. p. 23.
(註四) Ibid. p. 24.

生産的及び不生産的なる語に就て(一)

榎本 鑛 治

「勞。働。消。費、或は支。出。(labour, consumption, or

れたるものであり、又右の觀念を常に表示すべき術語の漠然たる用法に依て或る曖昧さが其の觀念自體の上に投せらるゝことは、あり得可きであるからである。更に新術語の紹介に對する術學的抗議が繼續する限り、精神的及び政治的主題に於ける正確なる思索家は、彼等の觀念表現に就て甚だ貧弱なる語彙に制限せられざるを得ない。故に(イ)人類の熟知せる術語が思索の道具として最大可能に利用せられなければならぬと云ふこと、(ロ)一語が既に他語に依て充分表現せらるゝ或る觀念の記號として用ひらる可きものではないと云ふこと、及び(ハ)極めて重要な觀念を表示す可き諸術語が比較的重要ならざるが如き觀念の表現として擅に用ひらる可きでないこと云ふことの三事は、甚だ緊要なる次第である。

依て私は次にミルの見解に従て生産的及び不